

行ってきました、受けてきました

## 新聞バッグ インストラクター研修

四万十川新聞バッグ。  
ご存じの方もきっと多いと思います。  
このバッグづくりのインストラクター研修を受講してきました。

机の上に並ぶのは新聞バッグづくりの七つ（八つ）道具です。  
はさみ、カッター、30cmくらいの定規  
小型のジャム瓶、缶コーヒーの缶  
のり、絵筆、細い棒（農業用のプラスチックの棒を切ったもの）  
え？これ何に使うの？と思わせる道具も。それは作業が進む中で分かるようになっていきます。



ワークショップに先だって、株式会社四万十ドラマ 畦地履正 代表取締役のお話をうかがいます。



新聞バッグの生まれたいきさつ。  
新聞がかつて発揮していた「くるむ」「運ぶ」役割を、地元のおかあさんたちがどのように工夫して生まれ変わらせていったか。  
そして、新聞バッグには、商品だけでなく川を含む自然や暮らしを守っていくというメッセージが一緒に入っていることを知ります。

いよいよワークショップに入ります。  
講師さんの親切な説明のもと、ひたすら、せっせと作ります。説明について行けなくてもひとりひとりへの指導がいただけるので安心です。



作業に熱中しているうちに初冬の日とはとっぴりと暮れ、電灯の明かりの下でも受講生の手は止まりません。



一日目はここまで。作業の後は地元の方と地元料理で交流会、そしてそれぞれのお泊まりの場所へ。

二日目は、

午前中めいっぱい昨日のおさらいをした後、自力で3サイズのバッグ制作。この3つのバッグは、この後審査に入ります。ドキドキです。



「新聞バッグコンクール」の力作の展示を見学します。

審査の間、受講生は「おかみさん市」の手作りバイキングで昼食してから、



作品を楽しく見ているうちに、どうやったらこうなるの？そうかあの工程をこうするのか・・・と昨日からの基本の工程がすとんと腑に落ち、さらにはいきいきと心の中で動き始めます。



そうこうしているうちに、課題の審査が終わりましたとのこと。心配していたけれど私の3つのバッグは審査をパス、いくつかのアドバイスもいただいて、無事お免状をいただくことができました。

名刺とTシャツも一緒に！



こうして、無事インストラクターになれました。さて、来年はクリエイターに成長して新聞バッグコンクールにチャレンジしたいものです！

ワークショップを終えてしみじみ思うこと。

私が子どもだったころ、読み終わった新聞紙がたまったら、近所の八百屋さんや魚屋さんが引き取ってくれました。知らず知らず、シワにしないようきれいに読みきちんと畳むことが、子どもの私たちにとっても身じまいのひとつになっていました。

ワークショップから帰って、変わったこと。

新聞を見る目が変わりました。この紙面をバッグに作ろう！と、読み終わった新聞紙をシワにしないようきれいに読みきちんと畳みましょう。あのころは小さな手のひらで、今はちょっと年季の入った手のひらで。